

**(1)「情報技術で拓く歴史人口学の世界」(組織者：川口洋会員) 6月2日(日) 開催**

1980年代末に、大型計算機を用いて「宗門改帳」から人口学的指標を求める研究過程を一元化する情報システムを開発して四半世紀が過ぎた今日、歴史人口学をめぐる情報技術は、飛躍的な進歩を遂げている。前世紀から利用されてきたRDB、表計算ソフト、統計パッケージに加えて、Historical GIS、時空間統計学、CGを含む多様な情報技術の前に、未開拓の新世界が広がっている。他方、過去の人口現象を復原する素材となる史資料についても、前世紀には、宗門改帳、戸籍、統計資料などに限定されていたが、新たな資料の利用可能性について検討が進んでいる。本セッションでは、情報技術を駆使して拓かれる可能性のある課題について、セッション参加者と共に検討することにより、歴史人口学の新たな方向性を探りたい。

座長：平井晶子（神戸大学大学院文学研究科・会員）

討論者1：友部謙一（大阪大学大学院経済学研究科・会員）

討論者2：奥貫圭一（名古屋大学大学院環境学研究科・非会員）

報告者1：川口 洋（帝塚山大学経営学部・会員）：江戸時代における人口分析システムの現状と課題

報告者2：杉藤重信（椋山女学園大学人間関係学部・会員）：親族関係分析システムの現状と課題

報告者3：永田好克（大阪市立大学大学院創造都市研究科・非会員）：GISを用いた東北タイにおける人口移動研究の現状と課題

報告者4：石崎研二（奈良女子大学文学部・非会員）：GISを用いた近代移行期における中心地システム研究の現状と課題

**(2)「アクチュアリーと人口学」(組織者：石井太会員) 6月2日(日) 開催**

形式人口学の重要概念の一つである生命表は、その黎明期において生命保険数学と密接な関連を持っていた。このように、元来、アクチュアリアルサイエンスと人口学は同じ源流を持ちつつ、それぞれが独自に発展を遂げてきた。しかしながら、近年、年金債務の算定基礎となる将来死亡率の動向や、その変動リスクを表す長寿リスクなどの概念が国際的にも注目されている等、再び、アクチュアリー領域において人口学における研究課題と共通する問題意識が生まれつつある。そこで、本企画セッションでは、死亡率推計などをはじめとした、人口学と関連するテーマについてアクチュアリーに講演を依頼し討論を行うことにより、人口学とアクチュアリーとの協調による相互の研究発展を目指す。

組織者：石井太（国立社会保障・人口問題研究所）

座 長：高橋重郷（明治大学）

報告者：井川孝之（みずほ総合研究所）、肥高昌憲（東京海上アセットマネジメント投信）ほか、  
アクチュアリー数名を予定

### (3)「北極圏の人口：健康・教育・環境とのかかわりについて」(組織者：田畑朋子会員)

The Arctic Circle(北極圏)が近年注目されている。なぜならば、米地質調査所によると、The Arctic Circle には世界の天然ガスや石油の未確認埋蔵量の4分の1が眠るとされ、また、地球温暖化で氷が解け、欧州とアジアをつなぐ新たな航路の可能性も開けたからである。

ロシア・北欧を中心とする The Arctic Circle では、気温と平均寿命との関係等、The Arctic Circle の人々の健康・教育・環境の研究が NDI を中心に、2012 年以降、盛んに行われ始めている。なぜならば、現在すべての人々は、ただ長く生きるだけではなく、健康で幸せに豊かに長生きできるのかに関心があるからである。

NDI : Northern Dimension Institute (EU、ロシア、ノルウェー、アイスランドの4地域における26の大学及び研究機関がメンバーとなっているアカデミックパートナーである。)

日本は、平均寿命は世界一の長寿国であるが、寝たきりで、人の介護が必要である高齢者が増加し、あるいは、孤独で貧しく、自殺を考える高齢者も増えている。すなわち、世界各国の平均寿命は計測されているが、健康寿命に関する研究は、どの研究もまだ限られた範囲のものであり、未解決な問題が残されている。

健康寿命 (Health expectancy) とは、自立して健康に生活できる期間を示す、平均寿命から介護 (自立した生活ができない) を引いた数である (Healthy life expectancy ともいう)。これは、2000 年 WHO が初めて公表した概念である (WHO (2000) *A Critical Examination of Summary Measures of Population Health*)。厚生労働省も2012年9月に日本人の健康寿命を発表したが、WHO とは健康寿命の定義が異なっている。

そこで、本企画では、The Arctic Circle のうち、自らの専門であるロシアと北海道大学ヘルシンキオフィスのある北欧、そこに、環オホーツク地域 (北海道及び中国東北部) を加えた北方圏の人口について、ここ北海道の地で、健康、教育、環境とのかかわりについて、それぞれの分野の専門家をお招きして考察する。最終的には、北方圏の人々はもちろんのこと、日本人の健康寿命を延ばすにはどうしたら良いかを明らかにしたい。

まず、組織者である田畑朋子が、ロシアの人口問題専門家として、北方圏地域の人口問題を明らかにする。なお、予定報告者である健康、教育、環境各分野の専門家の方々には、現在、本人の了解を求めているところである。

#### (4)「ワークライフバランス政策：研究と政策との交流」(組織者：永瀬伸子会員)

6月1日(土) 開催

少子化、雇用の2極化など、若い世代の仕事と家庭のバランス政策の推進は強く求められているが、まだまだ課題は山積みである。学会が開催される札幌市においても、課題は大きいであろう。今般、子ども・子育て三法の策定により、低年齢児保育の拡充については一定の前進が期待される。この分科会では、札幌市の状況、研究からの知見の発表により、研究と政策とのざっくばらんな対話を計画している。現場の理解によって、研究はすすむであろうし、また研究からの知見を政策担当者に対話することで、政策に建設的な貢献もできるだろう。樋口美雄教授からは慶応大学が中心になって行われているパネル調査の成果を労働の視点から、菅原ますみ教授からは(株)ベネッセと氏の共同研究である妊娠から3歳までのパネル調査の成果を、父母の育児と保育利用の観点からご報告いただく。また札幌市の仕事と保育の政策や課題について、自治体の政策担当者にお話をいただく。永瀬は人数調整要員であるが、5年女性の出産とキャリアの問題について述べる。津谷教授に討論者になっていただき、研究と政策をつないでいただく。

なお日本学術会議経済部会ワークライフバランス研究分科会において、2012-2013年の活動として、学会と政府や自治体との連携を目指す取り組みが計画されている。このセッションはこれを受けて、日本人口学会における当分科会委員(津谷、樋口、永瀬(委員長))が企画した。

#### 登壇者

樋口美雄(慶應義塾大学教授)

「ワークライフバランス：パネル調査の成果から(仮題)」

阿部 大(札幌市市民まちづくり局市民生活部長・男女共同参画室長、

または阿部様からのご推薦の政策関係者)

「札幌市におけるワークライフバランス、保育施策の現状と方向性(仮題)」

菅原ますみ(お茶の水女子大学教授、発達心理学)

「子ども発達と父親・母親の子育て時間と保育の質(仮題)」

伊奈川秀和(内閣府大臣官房少子化・青少年対策審議官

(併)大臣官房審議官(共生社会政策担当))

「子ども・子育て関連3法について(大都市の保育供給への対応)」(仮)

永瀬 伸子(お茶の水女子大学教授 (仮))

「女性の就業と出産(仮題)」

他